

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

拝啓、雨

県立府中高等学校二年 村上 実緒

拝啓

君が降る前のアスファルトの匂いがします
今にも泣きそうな空いっぱい
の君を見えています

君はどれだけ涙をのんでいるのですか

天にいる君の涙を地上の人間は

邪魔だと言わんばかりに傘で拒絶する

もし私までそうしてしまつたら

君はさらに悲しみを抑えられなくなるのでしょうか

悲しみを抑えられなくなった君は

ついに人々に涙を訴えかけ

地上にいる人々は

気だるそうに乾きかけの洗濯物を取り込む

悲しみは誰にも受け取ってもらえないまま

君は涙を流し続けるのですね

人間は止まることのない君の悲しみを「梅雨」と呼び

まだ降るのかと俯く

人間は笑顔でいる君が涙を流すのを「天泣」と呼び

珍しいと見つめる

人間も同じなのです

誰も受け止めてはくれない悲しさ

誰も気付いてはくれない寂しさ

人間も君も悲しみは似ているのですね

敬具

広島県議会議長賞

わたしのからだ

わたしのあしは
ちいさくて
わたしのあしは
おおきくて
わたしのあしは
おそくて
わたしのあしは
はやくて
わたしのあしは
ふとくて
わたしのあしは
ほそくて
わたしのしんぞうは
ちいさくて
わたしのしんぞうは
おおきくて
わたしのては

庄原市立比和中学校二年 白根 晟治

ちいさくて
わたしのては
おおきくて
わたしのころは
つめたくて
わたしのころは
あたたかい
ここにはいろんなわたしがいる
つぎのわたしにであうとき
どんなわたしになっているのか

広島県教育委員会賞

わたしの名前をおしえてください

広島市立千田小学校四年 橋本 知春

わたしは
おまつりの中の にんきもの

だれか

わたしの名前というもの
おしえてください

わたしがいるのは水の上

きょうは

今年でいちばんあつい日
だから

おふろにつかっているみたい

わたしは水色水玉もよう

いろんな色の なかまたち
大きななかまや小さななかま

いろんなかまとすんでるよ

たまになかまが

きよじんにね

つりあげられたり

しちゃうんだ

そしてわたしも

つりあげられそう

目をしゅうちゅうさせ

わっかにおし

いきおいよくあげられた

みんなさよなら おげんきで

そのあときよじんは

ヒュルルル ポン

ヒュルルル ポン

上下上下とふりまわす

あたまがくるってしまいそう

あつさにたえれずわたしはね
もうすこしではれつしそう

だれか

わたしの名前というもの
おしえてください

するときよじんが言ったんだ

「ヨーヨーとれてうれしかったね」

そうなんだ

わたしの名前は
ヨーヨーなんだ！

パンとなる時水もちり
それはわたしの おわりなの

現 代 詩 部 門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

ぼくの友だち

圭ちゃん どうしてたんだよ

おそいじゃないか

いつも

ぼくより先に来てるじゃないかよ

どうして

今日は

ぼくが来た時

いなかっただよ

どうしたんだよ 圭ちゃん

どうしてたんだよ 圭ちゃん

ぼくは 圭ちゃんがいなくて

心配したんだよ

圭ちゃんが いなくて

がっかりしたんだよ

圭ちゃん!!

圭ちゃん!!

ぼくは 圭ちゃんとみんなに会えて

呉市立蒲刈小学校六年 木村 圭介

毎日 楽しいんだよ
圭ちゃんが いない学校
おもしろくないんだよ
そうなんだよ

どうしたんだい 圭ちゃん
どうしたんだい 圭ちゃん

……

みんなに言われた

ぼくは……

ぼくの足をむかでが歩いたんだよ

びっくりして

超 びっくりして

むかでを はらったら

むかでが首のところへ来て

パニックになったんだよ

どれどれ 晃ちゃんが

ぼくの首のところをのぞいた

どれどれ

どれどれ

もう おしくらまんじゅうじゃん

圭ちゃん

むかでないよ

大丈夫 大丈夫

よかった

よかった よかった

拍手かっさいしてくれた

現 代 詩 部 門

広島市長賞

甲子園

英数学館中学校二年 桐山 昂大

昔は坊主頭ばかり
今は坊主頭じゃない人も
昔とは変わったねとお母さん
昔と今が違つて何が悪い？
坊主だったら何が悪い？
髪が長いと何が悪い？
髪が長いと何が悪い？
坊主だったら何が悪い？
髪型で野球をするわけじゃない
みんな野球が好きだから
ただそれだけ
髪型なんて関係ない
みんな目指してやっている
ただそれだけ
髪型なんて関係ない
この平和な日本で
野球ができることこそが幸せ

ただそれだけ
戦争で野球ができなかった人達は
髪型論争に何を思う？
そんな小つちやなことをと
ただ笑うだけ？
僕の印象に残ったのは
髪型じゃなく
がんばっている高校球児
ダイヤのように光る汗と涙
ただそれだけ

広島市議会議長賞

かわいい妹

お姉ちゃん

だっこしてあげる

いいよ

ぎゅっと体をだきしめる

でも 私の体はあがらない

ありがとう 上手にだっこ

できたね

今日は 夜神楽

みこ舞の発表

練習の成果を出すぞ：

お姉ちゃん がんばれ

お姉ちゃん がんばれ

オー オー ガオー

ワー ワー アー アー

お父さんのむねにしがみつく
足をばたつかせ ばたつかせ

呉市立蒲刈小学校五年 川本 紗楽

お父さんの体を

ものすごいはやさで

よじのぼっていく

よじのぼっていく

こわさマックス

よじのぼって さけんでる

(こわいよ) ワー

(こわいよ) ワー……

大丈夫だよ

そのおにさん

ともだちの お父さん

病気やけがからまりんを守るため

オー オー ガオーつて

さけんでくれてる

大丈夫

大丈夫

私もまりんを

守ってあげる

オー オー

ガオー

広島市教育委員会賞

共有

にっこり笑うと

にっこり笑う

そして二人で笑い合う

好きになる人形も

好きな食べ物も同じ

だから

私は、ダブルのかおと

楽しいこと おもしろいこと

物も笑顔も

共有

笑顔も

二倍 二倍 時には家族、友達が 数百倍の

幸せ うれしさ 楽しさにくれる

ある日とつ然

一発のばくだんが ある町に落ちた

遊びも 笑顔も 喜びも

食事も 家族も 家も 町も

呉市立蒲刈小学校六年 石原 実織

こわれて 何もなくなった
命を守るために逃げる
命をうばうためにばく弾を放つ
放つ人も
放たれる人も
楽しみ 喜びは……
こわれた共有
悲しみの共有
苦しみの共有
戦争、争いにあるのは
お互いに悲しく冷たい共有
未来のない共有
一つの玉の中に
数え切れない悲しみ
悲しみという共有が心の中をうめつくす
悲しみの共有をのりこえるには
だいじょうぶですか
わたしに手助けすることはありませんか
優しさを共有することから
はじめよう

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

我が家のハムスター

庄原市立比和中学校二年 垣内 優希

我が家には一匹のとてもかわいいハムスターがいた。
名前はアミ。

そのアミが六月十九日に亡くなった。

アミはおと年の三月に家族になった。

ペットショップのハムスターコーナーに行くと、

ほとんどのハムスターがきんちようして起きている。

しかし、その中で一匹だけ、

スヤスヤ寝ている。

ほとんどのハムスターがきんちようしているのに、

寝ていてとってもかわいかった。

だからその子を選んだ。

それがアミだった。家に帰って買ったハムスターの本を読むと、

「家に慣れるのは七日くらい、

それまではそっとしておこう」

と書いてあった。

だが、アミはなんと三日で慣れて、

家を走り回っていた。

ほくはアミのために色々なことをした。

おもちゃやエサをあげたり、

部屋をそうじしたり、アミが家に来てから

とても楽しい日が続いた。

六月の十九日に体調が悪くなった。

窓が開いて冬眠状態になってしまった。

これは人の体温で元気にもどるので、

少したつと元気になったので安心して学校へ行った。

しかし帰ってくるとアミはたおれていた。

冬眠状態になった時にどこか悪くなっていたのか。

手で温めてももうだめだった。

次の日にアミを庭にうめた。

思わず泣いてしまった。

アミ本当にありがとう。

楽しかったよと思いつつながら。

生き物にはいつかは終わりがくる。

動物を飼うときは、

その覚悟を持ち飼うこと、

アミにはこれを教えてもらった。

今が創るもの

県立広島皆実高等学校一年 高松 そら

夏休みに

物置のバスケットボールのほこりを払うと
頭の中のスクリーンが再生を始めた

蝉がうるさくて

木ごと燃やしてやりたいなんて考えながら
体育館で蒸されていたあの日

その場でドリブルをついているだけなのに
飛んでいってしまったこと

パスが怖くてキャッチできず
走って取りに行ったこと

初めて突き指してトラウマになったこと
顧問の先生が話している時に

ガリガリ君が食べたかったこと
シュートがよく入ってほめられたこと

捨てられず部屋の隅にある
くたびれたバスケットシューズを見て
また流れ出す

靴の裏がどんどん擦り切れた時
どれだけケガしても部活に出たかった時
シューズのひもを仲間とおそろいにした時
友達と朝練に向かう途中
坂から見た朝日がきれいだった時
「もう走れない」と寝っ転がって
仲間に引きずられ結局たたき起こされた時
試合中友達が変なこけ方をして
思わず笑った時

ひとつひとつが昨日のことのようで
今はもうコートを走らないはずなのに
何かが自分を満たしている
寂しくて仕方ないはずなのに

多分きつとそれは
あの瞬間が今の自分を創っているから

あきれられて悲しかったあの瞬間
部長になれなくて落ち込んだあの瞬間
初戦敗退で心にぽっかり穴が空いたあの瞬間
先輩に憧れたあの瞬間
後輩が生意気で腹が立ったあの瞬間

忘れられない瞬間ばかり

今この瞬間

未来の自分にとって忘れられないものか
未来の自分を創っているのか
今も昔もやらなきゃいけないことなんて
わからないけど
目標は大きければ大きいほど
見つけるのが簡単で
達成するのが難しい
困難だからこそ燃える人もいる
でも自分は
手元にある大切なものを
見落としてしまっていた
今それを拾いたい

現 代 詩 部 門

秋を弔い葬る

県立広島皆実高等学校二年 成藤 万葉

嫌な夜に目を覚ました

部屋に溶けていた重たい色のカーテンを押し上げる

暗闇にぼんやり浮かぶのは

冷たいアスファルト

棒立ちする電信柱

なんの印象にも残らないブロック塀

力なく枝を垂らす枯れた木

そつと息を吐き

冬の退屈さに幻滅する

布団に潜り 早く朝になればと

素晴らしい夜に目が眩んでいた

秋冷の心地よさを思い起こす

冴えた脳裏を埋めるのは
繭に包まれたような柔らかい静けさ
辺りを包む莊嚴な月明かり
慎ましくも華やかさを讃えた山々
夜を彷徨う強靱な命たち
固く目を閉じ
秋を悼む

遠い記憶の 玉響たまゆらの可惜あたらよ夜を

寒い夜に目を覚ました

眠ったままの頭が何かを求めて外を探る
滴に歪むガラスの奥には
地面を突く鋭い月光
ハラハラと落ちる六花りっか
寝起きの朦朧とした脳を刺す鮮烈な白
雪の重みに枝をしならせる木
思わず窓に手を伸ばし
けれど底冷えする

そこに命の色彩はないと知って

柔いシーツの海に溺れ 記憶を閉じる

秋を弔い 葬る

現 代 詩 部 門

ぼくを信じて

呉市立蒲刈小学校六年 望月 颯仁

ドクドク ドクドク

耳のおくでぼくをはげます

君ならやれる

颯仁なら きっと きっと

ゴールを決められる

自分を信じろ

きっとゴールを決められる

ぼくは 入れてやる

ぼくが 必ず 決めてやる

ぼくは

ぼくを 信じた

ピピーツ

ゴールキーパーと目が合う

そこだ 今

バン

右足の甲に一しゅんボールが当たった

ワー　ワァ：

みんなの声が聞こえた

ほくは

ほくを信じきった

昼の匂い

福山市立松永中学校三年 鹿野 縁

目覚めて、昼の匂いを感じます。

ばあちゃんが焼いてる卵焼き。

きつと今日も砂糖が入ってて、ちよっぴり甘い。

みかんの香りがする洗顔料。

今日はおしすぎたから妹に分けてやりました。

母さんが洗った体操服。

お風呂でふくらませるしゃぼん玉のにおい。

父さんの戸棚の本の、

庭の金木犀の、

うちの匂い。

明日もばあちゃんの卵焼きは、

ちよっぴり甘いのがいい。

現 代 詩 部 門

メツセージ

呉市立川尻中学校二年 堀 知代

その子は僕を手握って
ひらがなを書く練習中
僕が小さくなる頃には
もっと上手になるのかな
そんな僕は鉛筆だ

その子は俺を手握んで
間違えた字を消していく
俺がバラバラになってでも
最後まで使ってくれるだろうか
そんな俺は消しゴムさ

その子はぼくを手握って
真っ直ぐ線を引いていく
ぼくが目盛りがなくなっても
ぼくは役目を全うする
そんなぼくはものさしだ

その子は私を机に置いて
綺麗に文字を写して
私を使い切るときには
知識が沢山身に付くかな
そんな私はノートです

きつとみんな一生を
あなたのために過ごしたの
きつと次もこの想い
繋げていってくれるよね
そんな僕たち文房具

言の葉

県立府中高等学校二年 中川 七海

おかあさんが言っていた
五月雨がふるだろから傘を持って行けって
ぼくはなんでだろうって思った
だって六月の雨だもの

おとうさんが言っていた
気持ちの良い小春日和だねって
ぼくはなんでだろうって思った
だってまだまだ春は先だもの

おじいちゃんが言っていた
風花が少し冷たいなって
ぼくはなんでだろうって思った
だって庭の花たちは隠れているもの

おばあちゃんがぼくに言った
昔の人たちが過ぎゆく季節を恋しく思って

つくった言葉なんだよって
だって言の葉にすると枯れないでしょうって
ぼくはもうなんでだろうと思わなかった